通巻549号
Vol.71-1

英語教育
ENGLISH CLASSWORK

英語指導の可能性を広げる情報誌

CONTENTS

巻頭言　新里 眞男 ― 1

中英特集① 新学習指導要領を読み解く

読み物教材で心豊かに
　遠目塚 由美 ― 2
伝え合う力を育むために
　川副 紀子・合瀬 天規 ― 4

中英特集② 小・中連携

読み書き指導：小学校で何を教えるべきか
　萬谷 隆一 ― 6
中学校入門期における文字指導
　畠山 喜彦 ― 8
新入生が学習する語彙の現在・過去・未来
　西垣 知佳子 ― 10

Teacher's Forum

生徒の「発話の質」を高めるために
　浅野 雄大 ― 12
そのアンケートの目的は？
　芹澤 和彦 ― 13

連載① AI vs. 英語教育　「自動翻訳機」との付き合い方

「自動翻訳機」は人間になれるか
　中嶋 洋一 ― 14

連載② デジタル教科書を活用した授業

デジタル教科書で，絵を使って質問に即席で答えられる訓練を
　森 厚志 ― 15

英語教育時評　正頭 英和 ― 16

開隆堂

コミュニケーション活動に最適!! 表はイラスト,裏は動詞（句）

全国の多くの先生方の声にお応えして,SUNSHINE ENGLISH COURSE 1からついに単体で発売!!

アクションカード・セット

★英語教科書 SUNSHINE ENGLISH COURSE 1についている「アクションカード」がついに単品で発売されました！

★新事項の置換練習，インフォメーション・ギャップ活動，自己表現のヒントなど，多彩に使えます。

★オモテ面に動作を表す絵，ウラ面に動詞と名詞を組合わせた文字を示したカードです。

【アクションカード・セット】
北原 延晃, 開隆堂編集部 著
定価 本体2,700円＋税
【セットの内容】
1. 説明書『アクションカードの使い方』
2. 指導用アクションカード36枚1セット
3. アクションカード4枚1組×40セット

好評発売中

KAIRYUDO
開隆堂出版株式会社
本　社　〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 TEL 03-5684-6118 FAX 03-5684-6155
発行物のご案内はホームページでご覧いただけます。
http://www.kairyudo.co.jp/

巻頭言 Kantogen

半世紀近い英語教師人生を振り返って

新里 眞男（関西外国語大学教授）

今，修士1年の学生とJeremy Harmerの*The Practice of English Language Teaching* を読んでいる。冒頭に，英語教員に求められる態度として，J. Deweyの Open-mindedness, Responsibility, Whole-heartednessの3点が引用されている。これらは，英語教師人生の最終段階にいる私に，これまでの実践への反省を求めている。

1. Open-mindednessは，古い指導法に縛られず絶えず自らの授業実践の改善を求め，多くの授業を見て，類書を読み，自分の授業を省察し，改善することを意味する。私は，20代後半からHarold E. Palmerの The Oral Methodに惹かれ，彼の著書を多読した。また，他の先生方から「君の趣味は人の授業を見ることだろう」と言われたこともある。それが今はどうだろう。自分の指導法に固執していないだろうか。例えばTBLTやCLILなどのよい点を捉え，自分の実践の中に活かすという姿勢がなくなっているのではないかと思う。

2. 教師としてのResponsibilityは，学習者の英語学力をできるだけ向上させることだろう。私にとっての英語学力は英語でのcommunication 能力であるが，この能力を私が今まで担当してきた生徒・学生が身につけることに，私はそれなりの責任を果たしてきただろうか。これを書きながら少々自信を失っている自分がここにいる。

3. Whole-heartednessにはかなりの自信がある。時間と能力の許す限り，全身全霊をかけて自分の授業の改善に努めてきた。それでこの程度かという忸怩（じくじ）たる思いもあるが，それほどいい加減な授業はしてこなかったと思う。

これを読んでおられる先生方，どうかそれぞれの指導の場で，上記3点を念頭に置き，よりよい授業を目指していただきたい。私もまだ少し頑張りたい。

読み物教材で心豊かに

～ 英語×道徳×学活×他教科×協働=よりよき国際人 ～

遠目塚 由美
（宮崎県宮崎市立赤江東中学校指導教諭）

1. 読み物教材の魅力

教科書の読み物教材はどのように扱われているだろうか。ターゲットセンテンスが含まれていないことで，単語と重要表現を押さえた後，音読して練習問題を解いて終わりというような扱いになっていないか。昨年度３年生で，読み物教材を核とした年間授業計画の作成と実践をしてみて改めて感じたことは，読み物教材ほど指導者の思いを表出できる教材はないのではないか，ということである。新学習指導要領で示されている「人間性」を磨くために，読み物教材を有効に使わない手はない。

さらに，読み物を深く教材研究すると，「主体的・対話的で深い学び」を授業で実現するためには，英語という教科の枠だけでは十分ではないことに容易に気づく。物語の背景や考えるヒントとなるような知識を生徒が事前にもっているかどうかは，学びを深めるための重要な鍵である。ここに，教科間で横断的な指導をすることの意義があり，意図的にそれを仕組む必要性が生まれる。

そこで，読み物教材のもつ魅力を活かし，道徳や他教科と関連づけながら，教師の願いを反映させるために実践した取り組みを紹介したい。

2. 教師の願い

読み物教材を扱うにあたって，「目指す生徒像」として次のような目標を掲げた。

「これまでに培った知識，技能を総動員して，読み物教材から何らかを感じ，国際社会の平和と発展のために，まわりと協働して一歩を踏み出そうとする態度を身につける。」

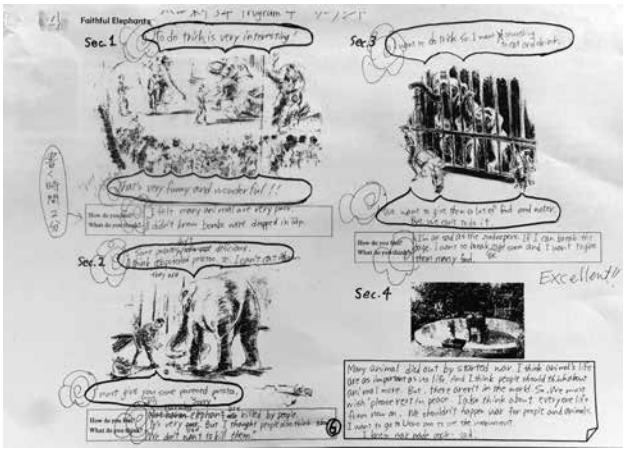
そして，上記のことを実現するための英語力，表現力を身につけさせ，協働して考える態度を日頃の授業で身につけさせたいと考えた。

3. 3 年生における「読み物教材」授業実践例（*Sunshine English Course* を例に）

(1) Prog. 4 Faithful Elephants

（英語×道徳×協働）

この単元を扱うにあたっては，心情を深く読み取らせるために，道徳の授業で行う手法を用いることにした。すなわち，ゾウの気持ち，飼育員の気持ちの両方を想像して，英語で表現させながら本文を読み進め，それぞれのセリフをグループで出し合った後，クラスで共有した。各セクションの最後に，“What do you think? / How do you feel?”という問いに対して，自分が感じたことを英語で書く活動をした。授業の終わりは，『かわいそうなぞう』の大型絵本を見せながら，日本語で読み聞かせをして，余韻を残すようにした。単元終了後は，亡くなったゾウたちにメッセージを書く活動を通して，戦争と平和について考えさせた。



授業で用いたワークシート

(2) Prog. 9 Education First:Malala's Story

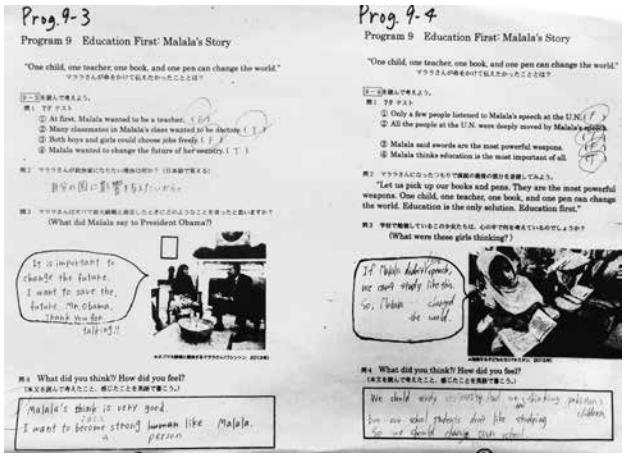
（英語×道徳×学活×他教科×協働）

この単元では，日本にいる自分たちが当たり前のように学校で勉強できることの幸せを感じさせること，世界にはそれができない子どもたちがいること

を知り意見をもたせること，そしてマララさんの行動から何かを感じて表現させることを目標とした。

本題材の核は，なぜマララさんが命を賭けてまで女子教育の重要性を訴えたのか，ということである。彼女の心情に迫るため，道徳，学活，社会科の授業と連携して「世界の子どもたちは今どんなことで困っているのか」をテーマに授業をし，「識字率」「貧困」「子どもの権利」「男女差別」に関する知識を与えた。

各セクションにおける授業展開は，登場人物のつぶやきを想像させてグループで意見交換し，その後本文の内容を理解して，“What do you think? / How do you feel?”という問いに対して自分が感じたことを英語で書かせて共有させた。単元のまとめとしては，マララさんに手紙を書かせる活動を行った。



授業で用いたワークシート

4. 1，2年生での指導について

3年生の授業において，上記のような授業を実現するためには，1，2年生でその基礎となるような訓練をさせておく必要がある。そこで，1，2年生での重点指導事項にも触れておきたい。

(1) 1年生での重点指導事項

①小学校から中学校へのスムーズな移行を目指した活動（音声中心の授業）

②特別支援が必要な生徒，slow learners に対応したフォニックスの指導法の開発と実践，ユニバーサルデザインの授業

③タスク型の授業

④この時期だからこそ大切にしたいポイントを盛り込んだ授業（英語らしい発音，リズム，イントネーション，チャレンジ精神，楽しんで学習に臨む態度）

⑤「英語が話せる日本人の育成」の基礎となる取り組み（即興で話す力，間違いを恐れずに発信する態度）

⑥英語を英語で理解させる手立て

⑦生徒中心の授業 / 学び合いによる授業 / 協働学習を中心に据えた授業（「アクティブ・ラーニング」の土台を作る活動内容）

(2) 2年生での取り組み

1年生で行ってきたことをさらに発展させ，3年生へのつなぎとなるような活動を行った。特に以下の3点に重点を置いて指導した。

①統合的な授業

②協働学習

③プレゼン力育成

5. おわりに

読み物教材を核とした取り組みを通して感じたことは，教材を扱う際に「生徒に何を感じさせたいのか」「人として何を学んでもらいたいのか」が具体的であればあるほど，他教科・他領域との連携によって教材がますます魅力的になるということである。

今後も，心豊かでかつ国際社会に積極的に貢献しようとする人材を育成するために，他教科と連携しながら教科書を有効に活用していきたい。

伝え合う力を育むために

川副 紀子　合瀬 天規
（佐賀大学教育学部附属中学校教諭）

1. はじめに

新学習指導要領では,「話すこと」の項目が「話すこと［発表］」と「話すこと［やり取り］」の２つの領域に分けられた。**ア**の「関心のある事柄」については，簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにすることが求められている。また，**イ**の「日常的な話題」については，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりすることができるようにすることが求められていることから，コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に応答する力を身につけさせる必要がある。さらに**ウ**の「社会的な話題」については，聞いたり，読んだりしたことについて，自分が考えたことや感じたこと，その理由などを，簡単な語句や文を用いて述べ合うことが求められていることから，教科書の内容から社会的な話題へつなげていくような単元構成を目指したい。

本校では，英語科で身につけさせたい力を，「伝え合う力」とし，この力を育成するために各学年における最終ゴールを設定し，「逆向き設計」論に基づく単元構成を行い，定期的にパフォーマンス課題を設定している。しかし，これまでの本校のパフォーマンス課題では，あらかじめ準備した原稿をもとに発表を行う者が大半を占め，生徒たちが即興性を意識しながら発表したり，意味のあるやりとりを行ったりすることができていないという課題があった。そこで，パフォーマンス課題に至るまでの帯学習において即興性を育むことができるような活動を仕組むことで，学習指導要領の目標に迫ろうと考えた。

2. パフォーマンス課題につなげる帯活動の実践例（3 年生）

パフォーマンス課題 : ミニディベート

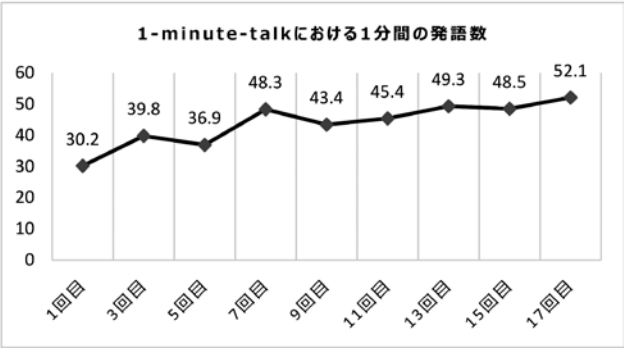
本単元では，ミニディベートに取り組むための帯学習として以下の３つを設定した。

（1）Useful Expressions

Useful Expressions は，パフォーマンス課題で必要となる表現を載せたリストで，各学年で定期的に使用している。本単元の Useful Expressions では，ミニディベートや評価コメントに必要な表現をインプットするために反復練習を行わせた。自分の意見の示し方や根拠の述べ方，ディベート特有の表現を身につけさせることで，自分の意見やその根拠をより明確に伝えたり，相手の主張を聞き取ったりする，さらにはジャッジに効果的にアピールできるようになることをねらいとしている。

（2）Word Counter を用いた 1-minute talk

即興性を高めるために Word Counter を用いた 1-minute talk に取り組ませた。中学３年生の目標を 50 語と設定し，生徒に示した。生徒は，１つのお題について１分間話し続け，ペアの生徒が Word Counter で語数を数える。ペアの生徒は，数え終わった後に英語で３つの質問をする。日常的な話題から社会的な話題，教科書の単元に関係するような話題を主に取り扱う。初めはうまく話せなかった生徒も回数を重ねるにつれ，語数が伸びてきた（下図参照）。



多くの友人と話すことで自信をつけ，語数を数えることによってモチベーションも向上した。

（3）2-minute debate

ディベートをより即興的に行うために，帯学習で2-minute debateに数回取り組んだ。ペアで賛成・反対に分かれ，①賛成②反対③賛成④反対（各30秒）の順で主張を述べ合う。事前に自分の主張やその根拠をワークシートにメモさせ，わからない単語はあらかじめ辞書で調べさせた。2-minute debateも回数を重ねるうちに主張や根拠がより深いものになり，盛り上がりを増していった。

3. パフォーマンス課題の実践例（2年生）

パフォーマンス課題：身近な出来事や気になるニュースについてポスターを使って説明する

2年生では，右のポスターを用いて図解表現し，ALTやペアの相手に自分の考えやその根拠を示しながら，わかりやすく説明する対話活動（ポスター）に取り組ませた。テーマをどのように説明していくかを構想する際に，マッピングを用いて考えさせ，それをもとにペアで自分のテーマについて説明し，質疑応答を行わせる。ペアから出た質問やその答えはマッピングに新たな情報として書き足し，必要に応じ，ポスターや意見文に反映させた。

そもそも質問は，話し手が具体的に話していなかったり，話し手の情報が不足していたりするときに，聞き手がその部分について，疑問に思ったり，情報を得たいと思ったりすることから発生する。生徒には，質疑応答がその情報の穴を埋めるための手段であることに気づかせ，他者との対話から多くのヒントが得られたり，そこから新たな考えが生まれたりすることを実感させたいと考えた。このような構想のもと，ここでは，身近な出来事や気になるニュースについて，自らが調べた情報やコミュニケーションの中で得られた情報を整理して，ポスターや意見文の作成に取り組ませることとした。

4. おわりに

即興性を求める活動を行う大前提として，生徒たちが英語を自由に使える雰囲気作りと，「間違ったらどうしよう」といった不安を取り除く必要がある。そのために生徒と教師，生徒と生徒のやりとりを数多く行い，原稿や練習なしで意味のあるやりとりが「できた」という成功体験を積み重ねさせることが大切である。文法等のエラーを訂正することも必要だが，ここでは，やりとりの内容に焦点を当て，対話の往復ができたことをほめることが大切であると考える。そして何より，生徒には英語を使って即興で伝え合うことの楽しさを感じてもらいたい。

●参考文献
上山晋平（2018）『はじめてでもすぐ実践できる！ 中学・高校英語スピーキング指導』学陽書房．
西岡加名恵（2008）『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書．

中英特集②
小・中連携

Case ❶

読み書き指導：小学校で何を教えるべきか

萬谷 隆一
（北海道教育大学札幌校教授）

本が好きな子どもは，学校で文字を習う前でも，親に絵本を読んでくれることがあります。

「むかし，むかし，あるところに，おじーさんとおばーさんがいました」

「おー，すごい，絵本読めるんだねぇ！」

でも，まだ文字を習っていない子どもが，なぜ読めるのでしょう。

その秘密は，親が絵本を読んでくれる音声を聞いて，場面ごとに音イメージを覚えてしまっているからです。あたかも文字を読んでいるようですが，あくまで音声を思い出して，読んでいる「ふり」をしているのです。

読みの最初の段階は，このように疑似的な読みの段階を経るようです．多くの子は，そのように言葉を音声で覚えて，徐々に文字だけでも音声化し，意味をとることができるようになります。つまり，読み書きは，あくまで音声で言葉に十分習熟していることが重要な基盤となるということです。柏木（2017）は，小学校の英語指導では，80%は「音声」と「意味」のつながりの指導に時間をかけ，20%を「音声」と「文字」のつながりに使うべきであると述べています。ぜひ「音」で英語に慣れた後に，文字を徐々に意識させる指導を心がけてほしいと思います。

1. アルファベットの指導

さて，読み書きの指導は，まずはアルファベットの大文字・小文字の指導から始まります。小文字は，大文字に比べて難しいため，まずは大文字から指導することになります。文字の指導においては，文字の名前（a の名前はエイ，b の名前はビー等：名前読み），表される音（a はアとエの中間の［æ］，b は有声の［b］を表す等：アブクド読み）の２つを覚えさせることが必要です。小学校英語では，アルファベットによく親しむことが，その後の読み書きの発達の基礎となるため，しっかりと教えておきたいものです。ただ筆順はそれほど厳格ではないので国語の時間ほど厳しく指導する必要はありません。

2. 単語の読みを覚える

単語の読みを覚えるうえでは，２つのアプローチがあります。１つは「まるごとアプローチ」で，もう１つは「きまりごとアプローチ」です。

（1）まるごとアプローチ

音声で覚えた単語のイメージをもとに，つづりを分析的に見るのではなく，「まるごと」つづりと音を結びつけることです。サイトワードとも呼ばれます。例えば who, are, you, this, house, eye などがあります。例えば who are you などはつづりの通りに読むと，「ウホ，アレ，ヨウ」となってしまいます。そうした，つづりが規則的ではない単語は，まずは何度も音に触れ，その後でまた何度も文字に触れることが大切です。例えば，キリンはつづりが難しく，giraffe ですが，「ジラーフ」という音と意味に十分に慣れさせて文字を提示すれば，子どもは「へー，書くとそうなるんだ」と認識するはずです。

このアプローチを進めるうえで理解しておくべきことは，音で英語を使う力が，単語をまるごと認識する力に密接に関連しているということです（Helman and Burns 2008）。音声中心の活動で覚えた単語や文を，文字でも確認する活動が大切です。

まるごとアプローチを進めるうえでは，英語の授業で２つの方法が可能です。１つは音で単語を提示するときに，さりげなく文字も出しておく方法です。ここでは「さりげなく」文字を示すということが大事で，あくまで絵や動作を見せながら意味と音を示

すことが中心です。もう１つは，授業での指導単語を授業の終末に，文字で示し，カルタをしたり，絵と文字とを線で結んだり，指なぞりをしたりすることです。またこの段階では，十分に音で慣れた単語を，お手本を「見ながら」書くことも行われます。

（2）きまりごとアプローチ

音声とつづりのつながりには規則があり，それを学ぶことで，つづりを見て音にすることができる力を伸ばすことができます。例えば, bus や fun など，系統的に提示すれば，u の文字の発音が「ウ」ではないとわかってきます。bus や fun は「ブス」「フン」と読まないとわかることです。このように u が，アのつまった音［Λ］と発音するのだと知っていれば，run や sun など知らない単語でも音読することができます。

こうしたきまりごとアプローチで学習を補強することは，読み書きに移行する際につまずいてしまう子どもには大きな手助けになると思われます。ただ，英語では７～８割程度が規則で説明できると言われてはいますが，例外や複雑なルールも多く，それらを全て教えるのは不可能です。ですので代表的なものだけに限って，練習することが有効であると思われます（例：bag, dog など母音の発音，cheese, sheep など２文字子音，cake, game など後ろに e がつく単語等）。ここでも上述のように，音声で既知の単語をたくさん増やし，それを使って「帰納的に」規則を習得させることが大切です。中学生になってつづりを思い出して書くときも，こうしたルールを知っていると, 役立つことが期待できます。

3.「書く指導」の前に「読む指導」を

最後に，これまでの小学校英語では，授業の発展として書く活動がよく行われてきました。ただ，授業構成が，聞く・話すことの指導の後に，書く活動がいきなり行われることがありますが，ぜひ十分に「読む」活動を行ってもらいたいと思います。聞く・話す活動で，十分に音声として慣れた単語をいきなり書かせるのではなく，絵を見て文字カードを取ったり，音を聞いて文字カードを取るカルタや，絵と英単語とを線で結ぶ活動，音を聞いて指でなぞるなど，まずは英単語を認識する練習がたいへん不足しています。とりわけ，海外の小学校英語の教科書では，そのような読みの活動が豊富に含まれていますが，現在使われている *We Can!* では，読みを中心とした初歩的な練習がほとんど行われていません。書く指導の前に，ぜひ文字を読んで認識する練習や活動を入れてほしいと思います。

4. 目的感のある読み書きを

読み書きの練習は，機械的になりがちです。できれば，ときには意味を伝える活動の中に組み込むことも意識していただきたいものです。例えば，好きな動物を伝え合う活動で, 音声でやりとりした後に，別ラウンドで，今度は，文字で示した動物リストを持たせて，単語を無言で指さしで答えるということも可能です（What animal do you like? に対して，指さしで pig などと答える）。読み書きを，伝達活動の一部とすることで，読み書きを学ぶ意味を感じてもらう機会にもなります。

●参考文献
柏木賀津子（2017）『音声から文字へのゆるやかな５ステップス』大阪教育大学 .
Helman, L. A., & Burns, M. K.（2008）. What does oral language have to do with it? Helping young English - language learners acquire a sight word vocabulary. *The Reading Teacher*, 62(1), 14-19.

中英特集②
小・中連携

Case ❷

中学校入門期における文字指導

畠山 喜彦
（宮城大学特任教授）

1. はじめに

2011 年度より開始された小学校の外国語活動が 2020 年度から高学年において「外国語科」として教科化される。今まで以上に密接な小・中連携が必要なのは言うまでもない。本稿においては，小学校英語の教科化を見据えて，中学校入門期における文字指導がいかにあるべきかについて考えてみたい。

2. 小学校における指導

今回の学習指導要領改訂により，小学校における外国語が教科化される。現在，小学校はその移行期間（2018, 2019 年度）になっている。小学校英語における文字の扱いは，現行学習指導要領の外国語活動において，あくまでも「コミュニケーションを補助するもの」と位置づけられていた。それが，今回の学習指導要領で教科化された「外国語科」においては，「書くこと」の目標として下記が明記されている。

「大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語彙を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする」

「自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする」

実際の教材（*We Can! 1, 2*）を見てみる。「アルファベットをなぞってみる活動」「自分の名前を書いてみる活動」はもちろんのこと，例文を与えられたうえでだが，「将来の夢を紹介するスピーチ」や「中学校でしたいこと」を書く活動まである。また，巻末にある Word List を見ると，これが小学校で扱っている語彙かと驚かされる。

もちろん，全ての児童がそのレベルまでたどり着いているとは考えにくい。今回の原稿依頼を受け，改めて小・中学校の先生方に聞いてみたが，「上位と下位の差が大きい」「アルファベットがやっと書け，単語を写したことがあるだけという生徒も多い」というご意見をいただいた。多くの小・中学校が似通った状態にあると考える。そのような児童・生徒に対して，中学校入門期においてどのような文字指導を行うべきだろうか。

3. 中学校入門期における指導

小学校において外国語が教科として位置づけられることにより，中学校における英語指導の位置づけが変わったと考える。生徒は，中学校で初めて英語という教科を学習するのではないのである。文字指導においても同様のことが言える。生徒は，小学校において，アルファベットを指導されてきており，単語を写す活動をしたうえで中学校に入学するのが大前提となる。移行期間の現在も同様である。中学校での指導において，この点を意識する必要がある。

既になさっていると思うが，中学校の先生方は小学校で使用されている外国語教材（*We Can! 1, 2*）に，必ず目を通していただきたい。小学校で生徒がどういった指導を受けてきたのかを知ることは，中学校での指導を効果的に進めていくうえで大切なのは言うまでもない。

しかし，全ての生徒がこの教材のレベルに到達しているわけではない。目の前にいる生徒たちが，実際にどこまでできるかを確認する必要がある。文字指導に関しては実際に書かせてみる中で，生徒の実態を確認したい。ほとんどの生徒にとって，ノートを使って本格的に文字を使用するのは初めてのはずである。文字を与えすぎることにより，小学校での

音声中心の学習との違いに驚いて，中学校での英語学習に拒否反応を起こさせない配慮が必要である。実態調査はその第一歩である。先生方のそういった姿勢は生徒に伝わり，心情面においても，今後の英語学習によい影響をもたらすはずである

4. 中学校における活動例

中学校での具体的な活動例を考えてみたい。

（1）アルファベットを学ぶ活動

「アルファベットの読み書きができること」と「英語の音に慣れること」が活動のねらいとなる。小学校で指導されているとは言え，全員がアルファベットをきちんと書けるかどうかはわからない。復習も兼ねて練習をさせたい。生徒の実態を知ることにもなる。その際，音声から文字へ円滑につながるように，聞かせたり声に出させたりする活動を意識したい。また，文字をなぞらせるだけのような，単なるドリル活動にならないようにしたい。例えば，次の活動を考える。

- アルファベット（a～zまで全て，あるいは特定の文字）を聞かせて，声に出させたり，書き取らせたりする。
- 提示されたアルファベットで始まる単語を聞かせたり，読ませたりして，単語を書かせる活動につなげる。

（2）単語を書く活動

小学校では，つづりを正しく書けることは求められておらず，単語を書くことができるレベルには到達していないことが指導の前提となる。そこで，小学校で音声として親しんだ単語を正しく書けるようにすることを生徒に意識させたい。小学校との連携を意識して，イラストやピクチャーカードを積極的に活用したい。また，単に文字を写す活動にならないように，声を出しながら，あるいは音を思い出しながら書くように指導したい。文字と音声の関係が十分つかめていないようであれば，適宜フォニックスの指導も行いたい。例えば，次の活動を考える。

- 音を聞かせて，単語の最初の文字を書かせて，単語を完成させる。　例）___esk
- 完成した単語を書かせたり，読ませたりする。

（3）文を書く活動

中学校での指導に小学校英語の教材を活用する形で考えていきたい。生徒の実態に応じて，難易度を調整しながら，様々な展開が可能である。例えば，次の活動を考えたい。

- 単語を挿入して文を完成させる。
- 生徒が知っている文を例文から写させる。
- 生徒が小学校で練習した文を書かせる。
- 紹介文やスピーチの原稿を書かせる。

（4）小学校における既習事項への配慮

小学校教材を見る際に，中学校の教科書で扱う内容や活動と重複している点の確認も意識したい。移行期間ということもあり，多数見つかるはずである。その対応も必要である。例えば，次の活動を考える。

- 実施しない。
- 復習，あるいは実態調査を兼ねて実施する。
- 音声の活動を文字による活動に発展させる。
- 内容の一部（題材等）を変えて書かせる。
- 新しい視点を加える形で書かせる。

5. おわりに

今まで「聞いたり」「話したり」してきた英語を「読んだり」「書いたり」できるようになることは，生徒の自信につながる。英語学習の長期的な動機づけにつながる効果的な文字指導を行っていただければと考える。

中英特集②
小・中連携

Case ❸

新入生が学習する語彙の現在・過去・未来

西垣 知佳子
（千葉大学教授）

次期中学校学習指導要領では，指導する語の数が大幅に増え，「迫りくる語彙増加の危機！」と言われることもあります。本稿では中学校入門期の語彙指導について，2019 年度新入生の学習語を現在，過去，未来の視点から考えてみます。

1. 学習語の未来：2021 年度

次期中学校学習指導要領で，語彙について大きく変わる点の 1 つは，指導する語の数です。小学校で 600 ～ 700 語程度，中学校では小学校で学習した語に 1,600 ～ 1,800 語程度の新語を加えた語，すなわち 2,200 ～ 2,500 語程度の語を，生徒は中学校卒業までに学ぶことになります。そして今年度（2019 年度）の中学 1 年生は，彼らが 3 年生になる 2021 年度に 2,200 ～ 2,500 語程度の語を学習する教科書に切り替わります。

新しい教科書の語数の多さに圧倒されますが，投野（2016）の調査によると，平成 28 年度版の教科書は，小学校での外国語活動の実施を踏まえ，6 種の教科書全てで 2,000 語前後の語が導入されているとのことです。小学校との連携を上手に図ることができれば，200 ～ 500 語程度の増加は絶望的な語数ではなさそうです。

語彙について大きく変わるもう 1 つの点は，今回の改訂で初めて「受容語彙」と「発信語彙」が区別されたことです。『中学校学習指導要領解説』（以下『解説』）によると，受容語彙とは「聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙」で，発信語彙とは「話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙」（p.34）です。『解説』によると，上で示した 2,200 ～ 2,500 語程度の語数は，主に受容語彙として教材等を提示するときの数を示しており，生徒が発信できるようにすることまでは求めていません。

通常の授業では，新出語は受容語彙として導入され，授業の中で生徒がそれにくり返し触れていくうちに定着し，いつしか発信語彙へと変容していきます。『解説』では「各学校段階等を通じてより確実に習得させていく過程が重要である」（p.35）と述べられています。

2. 学習語の過去：2018 年度

中学校で，新入生に再会させる語にはどのようなものがあるでしょうか。新入生が過去に触れてきた語を具体的に知る手がかりの 1 つは，小学校高学年の英語テキスト *We Can!* とその指導書です。テキストからは，生徒が文字を見て触れてきた語がわかります。その指導書にはリスニングスクリプトが載っているので，生徒が耳を通して触れてきた語がわかります。

では，*We Can!* を通して身につけることが期待されている語にはどのような語があるでしょうか。手がかりとなるのが，*We Can!* のテキスト巻末に 15 ページを使って掲載されている 5，6 年生に共通の Word List です。そこには「飲食物，学校生活，町・施設・職業，日常生活，スポーツ」等や「動作」「状態・気持ち」「数」等 15 種類のカテゴリーに属する語がのっています。また，Sounds and Letters と，アルファベット，動物，国，食べ物を使った 4 種類の jingle もあるので，6 年生の巻末には合計 505 の語があります（mineral water 等は 1 語と数え，重複する語を除きます）。これらを見ると，小学校では児童に身近な生活語が大切にされていて，生徒はそうした語に数多く触れてきていることがわかります。

気をつけたいことは，Word List では学習語の

意味をイラストで示しており，中学校教科書のような日本語訳はないということです。つまり語の「形式（発音）と意味」の結びつきは児童任せです。イラストから rice を「茶わん」，brave を「強い」と生徒が意味づけしているかもしれません。このような誤りは，英語の使用を重ねるうちに自分で気づいたり，指摘をされたりして修正されていくものです。誤りを発達過程と捉え，目くじらを立てずに大らかな気持ちで小・中の連携を進めたいものです。

3. 学習語の現在：2019 年度

現在の教科書 *Sunshine English Course* の学習語（SS 語）と *We Can!* の巻末語（WC 語）を比較してみましょう。SS 語のみに出現する語には，the，my，you，at，can 等の機能語が多くあります。小学校では英文法を学ばないので当然とも言えますが，これらの語は，中学校に入学して初めて，授業の中で意識が向けられることが想像できます。逆に WC 語だけに現れる語には，pudding，onion，popcorn（飲食物），firework，tag（遊び），salty，bitter（状態・気持ち）のような語があります。後者の語には，中学校でも意識的に再会させたいものです。

受容語彙から発信語彙へのなだらかな転換を考えると，教科書で新出語が出てきたとしても，次の授業ですぐに単語テストを行うのは生徒にとって負担が大きいでしょう。中学校においても，テストを脅しに使わない語彙習得のさせ方の工夫が必要です。

4. 既習語との再会と定着：Small Talk

小学校でせっかく身につけた語と中学校で再会させ，定着させるには，Small Talk が有用です。Small Talk とは，文部科学省が公表している『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（2017 年）で設定されているもので，「あるテーマのもと，指導者のまとまった話を聞いたり，ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりする」活動です（p.130）。ここでは，生徒どうしのペアで行う Small Talk をご紹介します。

『ガイドブック』によると，Small Talk は既習事項をくり返し使用する機会を保障し，その定着を図るために行います。授業の始めに相手を替えて 1 ～ 2 分程度の対話を 2 回程度行う対話的な言語活動です（p.84）。例えば，食べ物の語の定着を図る場合，新入生の友だちづくりの時期に，「友だちのことをよく知るために，好きな食べ物を質問したり，答えたりしてみよう」というテーマで Small Talk を行います。その際，事前に質問の仕方や使う英語を確認したり，指定したりしません。それを考えるのは生徒だからです。自分の考えや気持ちをもつことを大切にして，まずは生徒に言わせてみます。

生徒は What food do you like?，Do you like pizza?，I like chocolate. How about you? 等，自分の手持ちの英語を使ってやりとりします。また，相手の答えを聞いて Me too. や Oh, I don't like pizza. と応答するかもしれません。ただし，文法を習っていないので生徒は I like apple. と言うかもしれません。正確さは文法学習の進行を見計らって求めるようにし，この時期ではそのような生徒がいたら，Oh, you like apples. と先生が recast してあげましょう。また，英語を言えない生徒には「言いたかったのに，言えなかったことは何か」と質問をし，クラスで言い方を考えます。それが既習語であれば，定着のチャンスです。未習語であれば，語彙拡大のチャンスです。

小学校で Small Talk の活動が広がりつつあります。徐々に Small Talk に慣れた生徒も増えてくることでしょう。継続することで Small Talk の効果は上がります。Small Talk を用いた既習語との再会と定着によって，How（方法）と What（言語材料）の両面から小・中連携を図ってみる方法をご紹介しました。

●参考文献
投野由紀夫 (2016)『英語教育』2 月号，pp.17-19 大修館書店 .
文部科学省（2017）『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』

生徒の「発話の質」を高めるために

浅野 雄大（兵庫県神戸市立須磨翔風高等学校教諭）

1. はじめに

中学校・高等学校の外国語新学習指導要領において，国際的な基準（CEFR）を参考に，4技能が「5領域」になった。「話すこと」が「やり取り」と「発表」に細分化されたのである。

【やり取り】即興での会話，ディスカッション等
【発表】スピーチ，プレゼンテーション等

「話すこと」がこれまで以上に重要視されたと言えるだろう。

2. 生徒の「発話の質」を高めるために

新学習指導要領の内容を踏まえ，授業内で「やり取り」「発表」の指導に取り組んできた。しかし，生徒の「発話の量」が増える一方で，「発話の質」が思うように高まらないという状況に陥った。この状況を打開すべく，「発話の質」を高めるために取り組み始めたのが以下の3点である。

①「マッピング」「リソースの活用」で思考を広げる。
②「相互評価」「フィードバック」「振り返り」でメタ認知能力を高める。
③「書く」⇒「相互添削」で正確性を高める。

この3点を「やり取り」「発表」の指導と組み合わせることによって，「発話の質」が少しずつだが向上してきた。以下でその実践を紹介する。

3.「発話の質」を高めるための実践例

（1）マッピング

①教科書の内容に関する発問に対して，マッピングで「自分の意見」をまとめる
②教科書，ノート，プリント，辞書，他の生徒，教師などの「リソース」を最大限活用しながら，マッピング（思考）をさらに広げる

（2）ペアディスカッション【やり取り】

①4人1組を作り，ペアに分かれる
②一方のペアがディスカッションを行う
③もう一方のペアがルーブリックを基に評価する

（3）フィードバック

①評価者は相手に点数・コメントを伝え，被評価者はそれらをワークシートに書き込む
②教師から全体へフィードバックをする
③自らの気づき，生徒や教師からのフィードバックを参考に，マッピング（思考）をさらに広げる

（4）ペアディスカッション【やり取り】

①役割を入れ替えて，再びペアでディスカッションをする
②もう一方のペアがルーブリックを基に評価する
＊この後（2）～（4）をもう一度行う

（5）ライティング

①マッピング，ディスカッションの内容を参考に，「自分の意見」をライティングする
②ペアでルーブリックを基に相互に添削する

（6）スピーチ【発表】

⇒まとめの活動として，「自分の意見」を「自分の言葉」で相手に1分間で伝える

4. おわりに

上記の指導を継続的に行うことで，生徒の発話に少しずつ変化が見られるようになった。例えば，議論に深まりが出てきた，文法的な間違いが減ってきた，などである。今後も「発話の質」をいかに高めるか，試行錯誤を続けていきたい。

そのアンケートの目的は?

芹澤 和彦（常翔学園中学校高等学校教諭）

1. 先輩からの指摘

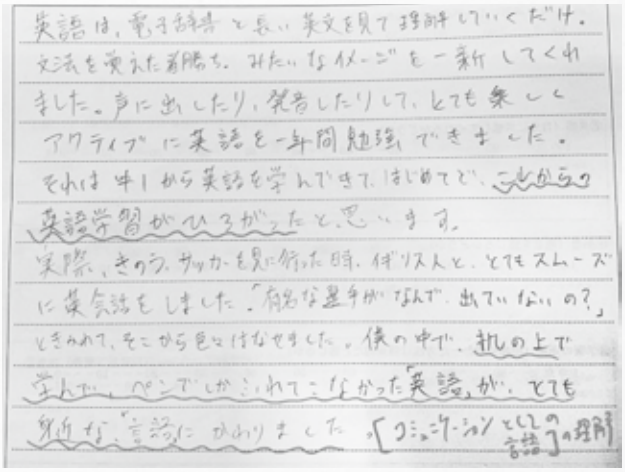
先日，SNS 上にて先輩の先生からこのような指摘をいただいた。

“経験則から言いますが，ごちゃごちゃ教員側が言うこと，考えることは，生徒にはまったく届いていないことが多いのが現状だと思います。例えば，よく若い教員がとるアンケートですが，①生徒は自分の本当に思っていることの半分もアンケートに書かないのが一般的です。②書いてもらったことだけを真に受けて，「生徒はこんなことを自分の授業に対して感じているんだ，俺ってええ教員やん！」と感じるのは思慮の浅い教員にありがちなことです（後略）”［下線は筆者加筆］

確かに，①も②も正論である。では，これらが起きる原因は何だろうか。それは「目的の喪失」にあると，私は考えている。

2. アンケートの2つの目的

では，教師が行うアンケートの目的は何だろうか。私は２つの目的を掲げている。１つ目の目的が「授業改善」だ。先ほどの指摘の中にある，②の「『俺ってええ教員やん！』と感じる」ことの問題点は，「授業改善」に至る過程であるはずの「教員評価」の段階での感想であり，肝心の「授業改善」に目がいっていない可能性があることだ。では，アンケートのもう１つの目的とは何か。それが，「アセスメント」つまり，「生徒の到達度の確認」である。先輩が指摘してくださったのは，私が次のようなアンケートを公開したためだった。比較的肯定的な言葉でまとめられているため，「浮かれてはいけないよ」というメッセージをいただいたのだと思っている。ただ，このアンケートの目的を考慮していると，どんなに肯定的，ましてや否定的なコメントがあっても，浮かれたり落ち込んだりしている場合ではない。この


英語は，電子辞書と長い英文を見て翻訳していくだけ，文法を覚えた前時，みたいなイメージを一新してくれました。声に出したり，発表したりして，とても楽しくアクティブに英語を一年間勉強できました。それは中1から英語を学んできて，はじめてで，これからの英語学習がひろがったと思います。
実際，きのう，サッカーを見に行った時，イギリス人と，とてもスムーズに英会話をしました。「有名な選手がなんで出ていないの？」ときかれて，そこから色々はなせました。後の中で，机の上で学んで，ペンでしかこたえてこなかった「英語」が，とても身近な「言語」にかわりました。「コミュニケーションとしての言語」の理解

文章からわかったことは，この生徒が「言語学習の入口に立てたが，自律的な学習をどのように行っていくかという見通しまでは立てられていない」という事実である。むしろ，アンケートにネガティブな意見があれば（もしくは意見を書かない），そこにこそ，教員側だけでなく生徒にとって解決すべき課題が隠れていることを，我々は忘れてはならない。

3. アンケートをとることの意味

時々「私はアンケートをとる勇気が出ません…」という言葉を耳にする。これは「アンケートの目的」の認識不足が故の言葉だろう。しかし，アンケートは，教師の数少ない「事実に基づいた授業改善の機会」であり「生徒の到達度の確認という教育活動の一環」である。特に英語は，多様な題材を言語活動を通して料理する授業のはずだ。

・この活動を通して，何を考え，どのようなことを工夫しましたか？（※質的。ねらいは言語使用）
・Lesson 1を通して，あなたの考えはどのように変容しましたか？（※質的。ねらいは概念形成）

どうすれば活動（技能）をよりよくできるのか。テーマについて，どんな考えがひらめいたのか。アンケートをとる意味とは，このような思考の過程を共有し，深め合う。これが「生徒と共に探究し，創る英語授業の始まり」なのだと，私は考えている。

「自動翻訳機」は人間になれるか

中嶋 洋一（関西外国語大学教授）

「自動翻訳」の機能の向上が目覚ましい。Google 翻訳は以前と比べてかなり進歩しており，特定分野ではほぼ正確に翻訳できるようになっている。「ポケトーク」（Wifi が必要）は「双方向翻訳」（例えば日→英，英→日）に対応しており，ヨーロッパで急増する難民に対応するために開発された，オランダの Travis One が原型である。その真髄は多言語の翻訳が可能であるということだ。海外旅行だけでなく，タクシーの運転手や海外からの観光客が多い店などでは必需品になるだろう。

ただ，言葉は「感情」を伴う。「場面」によって意味が異なることも多い。それが言葉の特質である。いくら精巧な AI であったとしても，人間が置かれた立場を理解し，その「感情」や「気持ち」まで読み取るのは困難だろう。また，「自動翻訳機」は，基本的に「受け入れ側」が使用するのは望ましくないという。話し手の本意を「翻訳された内容」で判断しなければならないからだ。このように，「文化」の理解，それぞれの「場面」でのニュアンス，そして話し手の「感情」への気遣いなどは，いくら AI が進化したとしても，なかなか対応しにくい部分だろう。つまり，「自動翻訳機」は，「社会言語能力」と「方略能力」の面で脆弱性を持っていると言える。この先，AI がどんなに進化したとしても，Technological Singularity（機械が人類に代わって主役になること）は起こらないと言われているのは，それが理由である。

そもそも，「自動翻訳」が目指しているのは，「情緒豊かさ」ではなく「速さ」である。次から次へと情報が更新されるウェブ上で使われている言語を，瞬時に翻訳することが可能なため，いち早く必要な情報を手に入れることができる。このような特性を，授業でどう活かせばよいのだろうか。次回は，それについて述べることにする。

連載② デジタル教科書を活用した授業

デジタル教科書で，絵を使って質問に即席で答えられる訓練を

森 厚志（静岡県三島市立錦田中学校教諭）

デジタル教科書の強みは，やはり聴覚教材，視覚教材が，複合的にまたほとんど準備していなくても多様に活用できる点にある。多くの機能の中で，特に重宝している機能の１つが，教科書にある絵を拡大表示することだ。これにより，生徒全員の表情，口の動きを観察しながらのやりとりが容易になる。活用場面として，教科書の Basic Dialog と Listen での活用事例を紹介させていただく。

まず，多くの Basic Dialog には絵がついている。この絵を見て場面や，会話中の人物やその関係について，例えば① Where are they talking? や② Why did she ask the girl about Karen?（*Sunshine English Course 3* p.16）といった質問を口頭で行う。①ならダイアログを読む前，②は読んだ後がよいだろう。会話の場面や，背景まで設定すると，その後のペアリーディングが感情や想いを伴った演技になり，ただ字面を追うだけの音読練習とは違ってくる。

Listen では，それぞれの絵について簡単なやりとりをする。１枚の絵を拡大表示する。3 年生なら Please describe the picture b. と投げかけることができるし，What can you see in the picture? や What are the students doing? などと学年や既習事項に合わせていろいろな質問もできる。そのような会話の後，リスニングを行う。事前に絵を確認する習慣もでき，一括再生で十分聞き取れる。

これらの即席の会話を，指名ではなく一斉の応答で数多く行う。苦手な生徒は周りの生徒の発表を聞きながら，真似をするだけで OK とする。教科書の多くの絵でこのやりとりを大切にしていけば，応答できるようになっていく生徒の成長が感じられる。デジタル教科書を活用して，生徒の頑張る表情を見ながら行うからこその取り組みとなる。次はこの絵でどんな質問をしようか，と考えるのが楽しい。

“EdTech” が変える教育

正頭 英和（立命館小学校 ICT 教育部長 / 英語科教諭）

EdTech（エドテック）

EdTech という言葉が，最近の教育のキーワードになっています。この言葉は，【Education】と【Technology】を掛け合わせた言葉で，ICT を活用した授業などを指し示すことが多いです。もちろん，「授業」という概念に捕らわれず，家庭学習や生涯学習という意味でも広く使われています。YouTube を使った学びは，ブームを超えて一般的にさえなってきました。大人の学び方を考えたとき，もはやスマートフォンなしでは考えられない時代になってきました。

学校の学び方は変わるのか?

一方で，学校の学習環境は旧態依然のままです。スマートフォンがこれだけ普及して，インターネットがあることが当たり前の時代の中で，学校だけが変わっていない現状があります。スマートフォンを持たせることさえ禁止している学校もありますし，黒板とチョークだけを使った授業が行われることもあります。私はそうしたことが「よいこと」であるとか「悪いこと」であるとかが言いたいのではなく，「時代がこれだけ変化していく中で，学校だけが変化していないのではないか」ということを危惧しているのです。

そんな時に耳にしたのがこの EdTech という言葉です。テクノロジーが大きな可能性を持っていることは疑いの余地のないところですが，果たして教育を変える力を持っているのでしょうか。

「動画ネイティブ」の時代

YouTube が当たり前の時代になってきました。ユーチューバーは子どもの憧れの的であり，学校から帰ったら YouTube を確認する，ということはもはや当たり前の時代です。生まれながらにして「動画」で育った今の中学生たちは，「動画ネイティブ」と言えるでしょう。そして「学び」も動画に移行しています。動画を使って学ぶことは，教師にとっては違和感のあることかもしれませんが，今の中学生にとっては最も身近な学習方法なのです。「動画を制する者は，教育を制す」と言ってもよいかもしれません。

EdTech が変えるモノ

テクノロジーは，ありとあらゆることを変える力をもっています。もちろん，「学びの在り方」も変えました。いつでも勉強できるようになりました。どこでも勉強できるようになりました。世界じゅうの誰とでも勉強できるようになりました。必要な情報を最速で与えてくれるようになりました。さらにそれは，「学校」という概念を変える力をもっています。

そんな中で私たちが考えなければいけないのは，「人の心を動かす」ということだと思います。同時通訳機が目覚ましい発展をしています。今の中学生が大人になる頃には，とんでもない性能になっているでしょう。これは間違いない事実だと思います。

そんな中で私たちが英語を教える意味は，言葉に「思い」を乗せて発信ができる人を育てることだと思います。EdTech 時代に求められる教育は「心を育てる」という，教育の根っこの部分なのだと感じています。

夏休みや冬・春休みの副読本として最適です！

CD付き リーディング教材

A1[2]… 定価 本体580～600円＋税　各巻A5判/40～48頁
B1…… 定価 本体600円＋税　CD1枚付き

好評発売中！ 新イージェストシリーズ

A1

アリババと 40 人の盗賊★

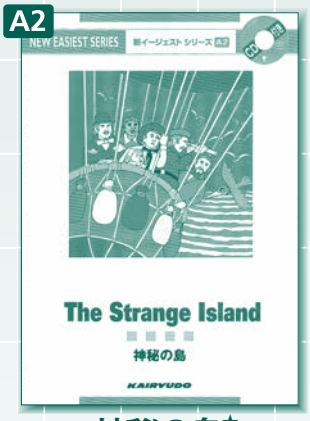
- 世界の名作を，いずれも中学校段階から読めるように，やさしい英語で書き直してあります。
- CDには本文すべてを収録してありますので，目と耳で楽しみながら学習できるリーディング教材です。

※ 読む時期の目安
A1[2]（中学2年前[後]期～）／B1（中学3年前期～）

A2

ドン・キホーテ

A2



神秘の島★

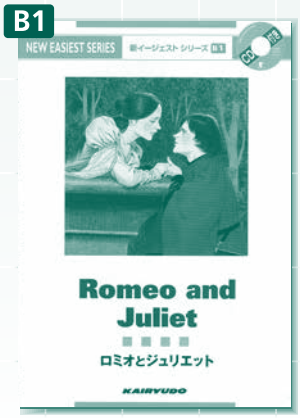
A2

イソップ物語★

A2

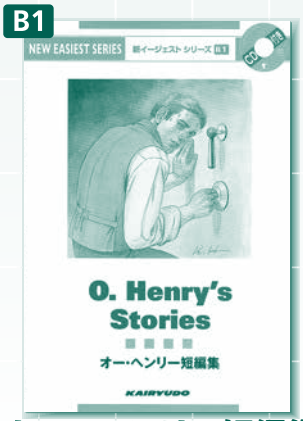
耳なし芳一・雪女

B1



ロミオとジュリエット★

B1

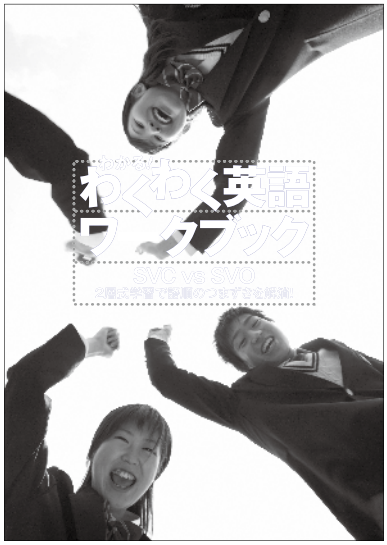


オー・ヘンリー短編集★

★はワークシート付きです。

KAIRYUDO
開隆堂出版株式会社
本　社　〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 TEL 03-5684-6118 FAX 03-5684-6155

発行物のご案内はホームページでご覧いただけます。
http://www.kairyudo.co.jp/



わくわく英語 ワークブック

SVC vs SVO

2層式学習で語順のつまずきを解消！

A4判／144ページ ■定価　本体700円＋税

監修・編著
中嶋 洋一（関西外国語大学教授）

分担執筆
英語をオモロう教え隊

先生，何で “He is like sports.” がダメなの？

生徒の疑問に答える待望の英語教材，ついに登場！

- ☆ SVCとSVOのちがいを画期的な２層式で学習できます。生徒の語順のつまずきはこれで解消！
- ☆ 「語順」と「チャンク」を系統的に学習できます。

「プロ教師」に学ぶ 真のアクティブ・ラーニング

"脳働"的な英語学習のすすめ

A5判／288ページ■定価　本体2,700円+税

編著
中嶋　洋一（関西外国語大学教授）
直山木綿子（文部科学省教科調査官）
久保野雅史（神奈川大学教授）

登場するのは"脳働"的な授業作りの「プロ」ばかり。知りたかった秘訣が学べる名著。
12人の実践家の芸術的な授業に「科学的考察と分析」を加えたアクティブ・ラーニングの指南書。

英語教育　非売品
Vol.71-1　（通巻549号）

2019年7月28日印刷　2019年7月31日発行　編集兼発行人　大熊 隆晴
印刷所　株式会社平河工業社　〒162-0814 東京都新宿区新小川町3-9
発行所　開隆堂出版株式会社　〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
☎(03)5684-6121（営業），5684-6118（販売），5684-6115（編集）
http://www.kairyudo.co.jp/

KAIRYUDO 開隆堂出版株式会社
本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03(5684)6111

北海道支社	〒060-0061	札幌市中央区南一条西6-11 札幌北辰ビル8階	☎011(231)0403
東北支社	〒983-0852	仙台市宮城野区榴岡4-3-10 仙台TBビル4階	☎022(742)1213
名古屋支社	〒464-0802	名古屋市千種区星が丘元町14-4 星ヶ丘プラザビル6階	☎052(789)1741
大阪支社	〒550-0013	大阪市西区新町2-10-16	☎06(6531)5782
九州支社	〒810-0075	福岡市中央区港2-1-5 FYCビル3階	☎092(733)0174